

1月13日

主教ヒラリー

Hilarius Pictaviensis

(315頃～367)

～西方のアタナシオス～

<人名事典などでの別表記：ポワティエのヒラリーウス>

ヒラリーはキリストが神であることを否定したアリウス派の神学者たちと闘った人物です。ガリア（現フランス）にあるポワティエの司教であり、西方のアタナシオスとも呼ばれます。

彼はガリアでその生を受けましたが、貴族であった両親はキリスト教徒ではありませんでした。ヒラリーは真理を追究しながら哲学と修辞学を学んでいき、また同時に結婚生活も送っていました。しかし、ある時聖書に出会った彼は、聖書を研究する中で回心し、30歳頃に洗礼を受けます。さらに330年には司教に選ばれます。

その頃、キリスト教では教理論争が激しくなり、キリストの神性を否定するアリウス派とアタナシオスたちが対立していました。そして355年のミラノ会議において、アリウス派を支持していたローマ皇帝コンスタンティウス2世は、アタナシオスに対して追放令を出します。ヒラリーはこの命令に反抗するのですが、その行為が反逆罪とされて、小アジア（現在のトルコ）へと追放されます。

ヒラリーが小アジアに追放されたのは356年でしたが、そのころの小アジアはアリウス派の考え方が浸透している地域でした。しかし彼はこの追放された期間を最大限に利用します。ギリシア語を、



ポワティエの
ヒラリーウス

14世紀に描かれた、
ヒラリーウスが叙任される場面

また東方神学を学んでいながらアリウス派との論争の分析をし、その批判や見解をまとめていきました。そしてその成果をヒラリーは出していきます。小アジアの人々にアリウス派が主張する説の不合理性を徹底的に批判したのです。これにはだれも歯が立ちませんでした。その結果、小アジアの人々はヒラリーを邪魔に感じ、早くガリアに戻すようにと皇帝に要請したそうです。

そしてヒラリーは360年にガリアに戻り、その後もアウクセンティウスなどといったアリウス派の人たちと論争をしながら、その生涯にわたって正統教会の擁護を行っていきます。

彼の著作には、反アリウス主義の文書である「De Trinitate」や「De Synodis」、またマタイ福音書や詩篇の聖書注解など多数のものがあります。そして1851年、教皇ピウス9世により教会博士の称号を得ました。

<特禱>

信ずる者の光、魂の牧者である全能の神よ、あなたは、その言葉によってあなたの羊を養い、その模範によって彼らを導くために、しもべ、主教ヒラリーを公会の主教に召されました。どうかわたしたちに恵みを与え、信仰を守り、その生涯に従うことができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン